

小説・秋田魁新報社

虫けらの魂

市川 雅由

〔著者略歴〕 ^{いちかわまさよし}市川雅由

昭和17. 12. 30東京生まれ。

満1歳、結核のため父と死別。2歳、秋田へ疎開。

4歳で母結核で死亡。9歳、出家。秋田県内の高校卒業後、昭和38年秋田魁新報社に入社。漢字テレタイプ室、電送室、校閲部、放送部を経て43年社会部記者。49年角館支局長。54年社会部次長。57年、39歳で事業局開発部長。60年大曲支局長。62年8月、放送部長発令直後に依願退職。

住所（〒010）秋田県秋田市泉釜の町8-20

定価 1,500円

小説・秋田魁新報社

虫けらの魂

昭和六十二年十月八日第一刷発行
昭和六十二年十二月十二日第三刷発行
©

著者 市川雅由
発行者 市川雅由

発行所 市川総合文化企画研究所

発売所 秋田国文社

秋田県秋田市山王四丁目六一三一
電話 〇一八八二三八八四一

印刷所 恵友社

小説・秋田魁新報社

虫けらの魂

市川雅由

——妻と二人の子供に捧げる

はじめに

人間、一生の間に、その生死を賭けて闘わなければならない時があるだろうか。よもや、あるなどとは、かつて一度も思ってみなかった。

（闘わねばならぬ。その時が、必ず来る）

そう思ったのは昭和六十年三月半ばであった。しかし、何一つ武器がない。素手で闘うには、相手はあまりにも巨大な力を持っている。闘うからには、是が非でも勝ちたい。石に噛りついてでも勝たねばならないのである。

秋田魁新報社に入社して二十五年間、一度だけ、男泣きして帰ったことがある。信じて仕えてきた上司に、「お前は虫けらと同じだ」と言われた時である。

私は今、その、虫けらになろうと思う。所詮、虫のようなものだったではないか、と思うからだ。与えられた仕事を全うした満足感は何度となく感じてきたが、やっぱり、虫のように扱われてきたのが本当ではなかったのではないだろうか。

幸か不幸か、私は秋田魁新報社編集局社会部次長となった昭和五十四年秋から事業局開発部長時代の約六年間、「特命」という名のもとに同社の「子会社」である岩城総合開発・岩城カントリークラブの再建とFM秋田の開局のため働く機会に恵まれた。ゴルフ場再建のため約八億円、FM局

開局のため四億五千万円、計十二億を上回る巨額を事業資金として動かし、目的をすべて成し遂げようとした直前の昭和六十年二月、私は突然、担当をはずされた。そして十日ほど後、私と業者の癒着説が流布した。更迭の理由が業者との癒着であるといわんばかりのタイミングだけに、多くの人々は当然のように噂を信じた。

青天の霹靂^{へきれき}。身に覚えのないことではあったが、私には身の潔白を証す手だてがない。噂は瞬く間に社内から関連会社、そして外部へと流れた。

晴らしような冤罪。私を窮地に陥れた黒い噂は、恐ろしいことに秋田魁新報社代表取締役社長・倉田儀一を始めとする一部役員、倉田社長の三男で当時私の部下であった瑞夫（編集局放送部長を経て秋田テレビに出向、同社業務部長）から出ていたことが分かった。

人間にとって、特に新聞記者にとって、名誉を失うことは死をも意味する。私は、守り続けてきたさやかな名誉を無惨に踏みつぶされたのである。それはまさしく、哀れな一匹の虫けらであった。

それから一か月後、私は大曲支局に左遷された。現職部長としては異例中の異例、前任の支局長は次長待遇だっただけに、三階級格下げの大左遷であった。当然のように、私の黒い噂は左遷という裏付けを得て「事実」となって世に広まった。

私にはなすすべがなかった。いつかは晴れる、いつかは分かって貰える、そう信ずるしかなかった。そして二年、私の名誉の回復は絶望となった。いったん出た本社勤務の内示が直前で取り消し

になるなど、虫はささやかな羽搏きさえも自由にならなかった。

一方、権力に座した倉田は、その老害を厭うことなくまき散らかした。

創刊以来百十数年、全国地方新聞のトップクラスの実績を有していた秋田魁新報は、今、見る影もなく荒廃している。特にこの十年、魁社の実態は、まるで、坂道を転がるが如し——と断言してよい。それでもなお壊滅しないのは、悲しいかな、読者県民が許す絶対的な「新聞権力」「魁権力」のせいである。

なまじ権力があるが故に魁社は増長する。伸びきったゴム糸を、彼らは強大な弾力を有していると錯覚しているに過ぎない。彼ら、とは、私が今まさに闘わんとしている相手である。それは秋田魁新報そのものではない。盟主倉田とそれを取り巻く経営首脳陣である。

私は、倉田を中心とする経営陣の仮面を剥ぎ、知りうるすべてを明らかにし、その審判を読者に委ねたいと思う。

魁社の実態、真相を明らかにすることで、あるいは、その関係者に深い傷を負わせ、名誉を傷つける大事を招くかも知れない。とりわけ、本書が刊行されることにより、倉田一族の受ける打撃は大きいものがある。しかし、受ける打撃と、これまでに得てきた恩恵、そして、倉田始めその周辺が魁社を私物化、墮落化させることで社員、読者に与えてきた影響を考えると、私はどうしても許せない。何ら武器を持たない一介の虫に過ぎない私にとって、かの権力と闘い、自らの冤罪を晴らすには、本書を刊行するしかないのである。

本書が世に出、どんな影響を及ぼすのか、私には推測がつかない。一匹の虫けらが、「魁権力」に抗い、一矢を報いることなど出来やしないかも知れない。仮に、魁紙を窮地に追い込む結果が出たとしても、それは私の本意ではない。倉田がその院政を解き、経営陣が総退陣して一新されたなら、魁紙は必ずや県民の信頼を回復すると信ずるからである。

新聞は、天下の公器であるという。公器であるが故に、大きな責任がある。公器である新聞の経営陣は、「公人」であると考えたい。その意味で、登場する役員、幹部社員をすべて実名にした。部長以下の社員、その他をイニシアルにしたのは、責務がないからである。「小説・秋田魁新報社」という副題をつけたのは、取材しきれない部分からくる推測があるからである。

なお、文中、敬称はすべて省略させていただいた。

筆者

目次

はじめに

第一章

13

プロローグ 14

後継者選びに苦悶する人見社長 22

高田に未練を残しながらも倉田を選ぶ 28

倉田体制の確立 39

第二章

51

倉田社長のカバン持ちで中国へ 52

倉田社長の素顔を垣間見る 58

倉田ジュニアとの出会い 62

わが世を謳歌する倉田社長の悩み 67

高橋取締役の誕生 70

ゴルフ場再建責任者に抜擢 73

難問山積で難航する再建計画 78

ゴルフ場改造に着手 84

下衆^{げす}のかんぐり——鷺尾局長 91

「お前は虫けらだ！」 100

第三章

105

足の引っぱり合いにつけこむ倉田社長 106

F M開局準備に孤軍奮闘 117

ジュニアの入社を画策する倉田社長 129

周囲の思惑をよそに開き直る倉田社長 135

倉田瑞夫の入社 139

私の下で働くことになった瑞夫^{ジュニア} 145

鷲尾局長の土地を買う瑞夫^{ジュニア} 149

第四章

159

無言電話に悩まされる瑞夫^{ジュニア} 160

愚行を繰り返す瑞夫^{ジュニア} 165

F M開局のための大仕事 175

板ばさみで疲労は極限に 186

容赦なく押し寄せる仕事の波 191

五取締役抜きの緊急役員会 198

驚くべき「瑞夫^{ジュニア}発言」 200

溝を深める佐藤副社長と高橋局長 205

無言電話の主の正体 208

瑞夫^{ジュニア}を見放す 213

第五章

219

一人の若者の死

220

F M開局まであと二か月

225

青天の霹靂！ F M撤退命令

230

襲いかかる第二、第三の嵐

240

「お父さん、悔しくないの」

247

限らない瑞夫ジュニアの陰湿な報復

252

潔白を天地神明に誓う

259

ゴルフ場工事で県に圧力

263

秋田魁新報社経営白書

270

終章

297

大成功を収めた「高橋の秋田博」

298

秋田テレビ内紛のあとさき

304

目に余る「虫いじめ」 314

「夢」に酔う鷺尾局長 320

正念場を迎えた倉田社長 323

高橋局長解任と前代未聞の新体制誕生 332

取り消された異動内示 337

それぞれの人間、それぞれの人生 343

エピソード 352

あとがき

第一章

プロローグ

二月二日は秋田魁新報社の創刊記念日である。昭和六十年のこの日の朝、私は勤続二十年の表彰を受けるため少し早目に出社した。

入社以来、表彰などという晴れがましい席に出るのは勿論初めてのことである。

思えば、昭和三十五年、スタートしたばかりの漢字テレビタイプ室（共同通信から送信されてくる国内外の全ニュースを受信する機械室）でのアルバイトを経て三十八年に入社。翌年四月に社員採用となって二十一年十か月。この日は私自身にとっても記念すべき日であった。

表彰式を終えると、私は直ちにFM秋田に向かった。開局準備委員として同社代表取締役社長・伊藤正一（秋田活版社長）の補佐役を務め、二か月後の開局を目指し準備に追われていたからである。

あわただしくFMに向かったのは秋田テレビ専務・加藤重夫と午前十時半に会う約束があったからだ。

FM秋田は全国十五番目のFM局、東北では仙台に次ぐFM局として開局目前であった。すでに新社屋が完成、県民の期待は高まる一方であったが、造る側にとっては、全国の新聞、テレビなどマスコミ電波関係者の注目を集めていただけに不安もまた大きかった。

電波を新聞販売の拡大戦略に活用しようという東京紙（朝日新聞、読売新聞など）との申請出願競争に端を発し、県内マスコミとの対立で暗礁に乗り上げていたFM秋田の設立問題に首を突っ込んでからすでに三年、FM秋田は難産の末にやっとうぶ声を上げようとしていた。その誕生のために深く関わってきた私にとって、FM秋田の成否は私自身の命運をも左右しかねない重大事であった。瓦解寸前の岩城カントリークラブの再建がフロックであったなどと言われないためにも、FM秋田は是が否でも成功させなければならぬ。そのためにはどうしても秋田テレビの力を借りなければならなかった。

私は秋田テレビの営業力と組織を活用しようと考えていた。それは秋田テレビと業務提携を図ることであった。

開局するFM秋田がどんな個性を持ったFM局であるのか。電波にのせるタイムテーブルが「表看板」だとしたら、営業、つまり経営の根幹を担うスポンサー獲得が「裏看板」。表と裏といって、それは車の両輪であった。右ききの私は、右手に営業、左手にタイムテーブルを、と考えていた。その最重要課題である営業について、加藤と詰めなければならない。

秋田テレビの組織を活用する代償は、営業マージンを支払うことである。私の出した条件は「7・3・55」。つまり、十万円の営業収入に対しFMが七万円、秋田テレビが三万円。秋田テレビの三万円は会社と社員が一万五千円ずつの「五分五分」というものである。現場で苦勞する秋田テレビの社員に手厚く報いることが真意であった。一か月百万円稼いでくれたなら十五万円にな